

実践型地域研究に関する覚書

東南アジア研究所 安藤 和雄

地域研究が学問的な営みであると位置付けされる以上、学問の専門化は目的と方法論の精緻化のためには避けてとおれない発展の道筋です。地域研究をなんでもありの地域研究から、そろそろ、従来の個別学問を基本とする普遍化を重視する地域研究と、普遍化というよりも地域がもっている個性や人々がもっている問題の克服や解決を重視する地域研究とに区分し、目的や方法論を議論していくことをすべき時期にきていると私は考えています。実践型地域研究と名づけたのは、その思いを具体化していきたかったからです。

実践型地域研究を説明するためには、地域に対する研究の二つのかかわり方の姿勢から話を始めることが分かりやすいでしょう。

フィールドワークを用いた地域研究を志している研究者の間では「どこを研究しているのですか」という聞き方よりも「どこに行っていますか」と研究対象の地域を聞かれることが多いです。これを違う表現をするならば前者では「地域を研究する」意識が、後者は「地域で研究する」意識が無意識のうちに表現されていると見ることができます。これを模式化すると図1と図2となります。「地域を研究する」図1では、研究者である「私」はあくまで主体であり、研究の対象である地域の人々や問題（地域が何であるかを含めて）は客体として位置付けられます。したがって、「私」と地域の人々の存在が分離した状況で研究が行われます。研究者である「私」の関心は、多くの場合、問題の具体的な克服にあるというよりは、問題の分析がいかに客観性をもつか、つまり、客観性という観点が重視されて分析が行われます。客観性が重視されるのは、「私」の分析の結果が普遍化されるこ

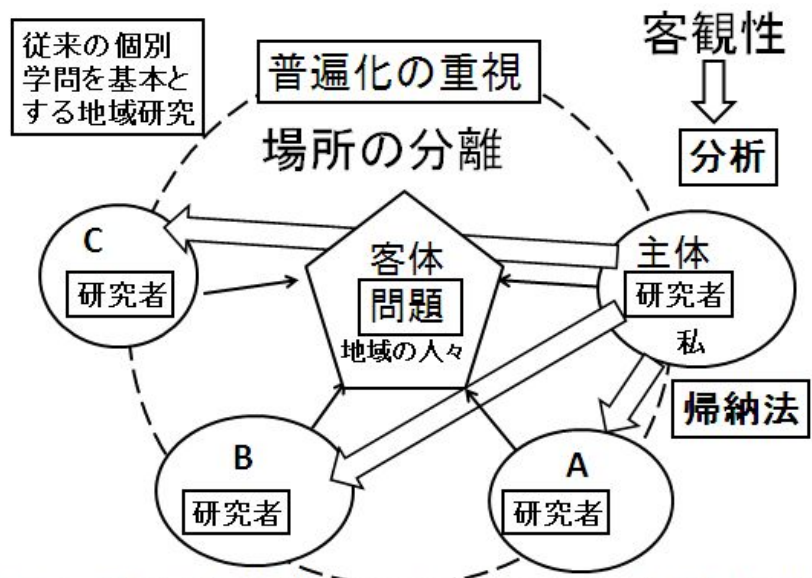


図1 存在の分離 (Ando (2010) を修正引用)

と、すなわち、誤解を恐れずに言えば、他の研究者 A、B、C に理解されることに究極の目的が設定されているからです。特に、普遍化は帰納法の分析によって論理的に推論されるという特徴があります。帰納とは「推理および思考の手続きの一つ。個々の具体的事実から一般的な命題ないし法則を導き出すこと。特殊から普遍を導き出すこと」であると説明され、帰納法は「帰納を用いる科学的研究法。特に因果関係を確定するのに用いる」と説明されています（広辞苑第五版）。つまり科学的方法を意識した地域研究でもあるのです。科学は対象を外から観察することを前提とします。科学的方法にこだわる限り、地域の人々や問題はあくまで客体であり、研究の主体である「私」とは存在が分離した関係になるのです。「問題はあなたの、彼らの問題」であり、「問題は、私の問題」ではあり得ません。したがって、問題の解決や克服を最後までやりきることは研究者である「私」の最終ゴールではないことを意識・無意識のうちに自分に言い聞かせる「科学的正統性」を設定していることに気づかされるのです。「私」にとってもっとも関心があるのは普遍化であり、他の研究者を説得することにあるからです。

ましてや農村開発の問題などに焦点があてられる時には、当該地域の問題を普遍化しやすいのは、他地域との比較による（論理的な比較も含めて）、帰納法の適用です。これで問題の普遍化がされやすくなります。とくに援助事業では、地元の人々のニーズにぴったりと当てはまる事業を計画し、実施することが難しいとよく指摘されてきました。このことは、援助事業計画策定を行う専門家やコンサルタントとよばれる研究者が「地域を研究する」限り、事業内容というペーパーワークが、地域の外の援助をする側の人々を説得するところに重点が移ってしまっているからなのでしょう。問題の解決や克服という地域の人々の問題意識が置き去りにされやすいことが起きていたのではないかと、私には思えるのです。

一方、「地域で研究する」図 2 においては、研究者は、地域という場に、物理的には包含されることとなります。つまりその場に立つ以上、本来は、存在は共有されているわけです。しかし、実際にはそんなに簡単に存在の共有が自覚されるわけではありません。研究者としての「私」が主体であり続ける限り、精神的には「場の分離」という、肉体と精神のねじれ現象が起きます。「フィールドにでかけてきます」と言って元気な顔をしてでかけていった新入生の大学院生が、帰国して「分かりません」といって、げんなりとした表情をしていることをときどき見かけますが、私は、根本的には、この肉体と精神のねじれが起きてしまっているのだと診断しています。大学院生は、研究の現場に立つことによって、主体性を喪失してしまっているのです。自分を見失っているともいえます。ただし、私はこのことをマイナスだとは思っていません。むしろ、大変重要な精神の変化が起きているのだと捉えています。無意識における「私」という主体の否定により、地域の問題、地域の人々が主体として浮かび上がってきているからです。「私」の主体性が、地域の当事者性になりつつあるプロセスなのです。大学院生が研究者である以前に、地域の人々と同一の場所に存在することで、存在の共有を行おうとしている人間の本能がそうさせているの

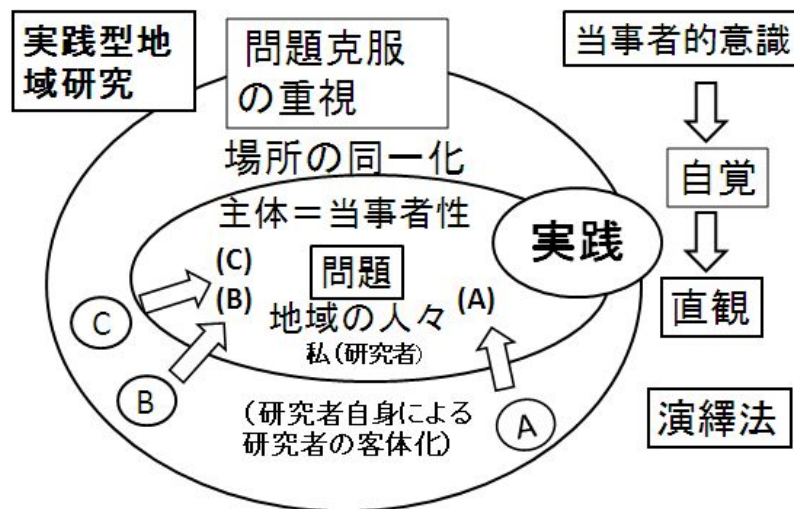


図2 存在の共有 (Ando (2010) を修正引用)

だと理解できるでしょう。言い方を変えるならば、研究者自身による研究者の客体化が行われているのです。自分の主体性の存在を一度疑うことで、真の主体が浮かびあがってくるのです。ここではもはや、「私」の分析の普遍化は主体が行う研究の目的とはなりえません。研究の目的は、地域の人々と存在を共有することで見えてくる当事者が直面している問題の克服であり、解決であるのです。そして、問題の克服や解決が強く意識された時に、帰納法による分析方法では、問題の解決が見えてこないことが分かってくるのです。N = N + 1 である帰納法では、問題の本質はなにも変わっていないことに気づかされるのです。N = N' となることが必要なのです。そのためには、目的を事象説明の普遍化においている帰納法では、発想のジャンプは残念ながらあまり期待できないことになるのです。当事者あるいは当事者的な意識をもった者がもっている経験に裏打ちされた直観を重視し、N = N' であるとイメージすることが必要になります。そのためには、N ≠ N + 1 である N = N' となる新しい N なのです。N を N' に変化させていく推論（論理）が求められていくこととなります。あるいは、N = N' をしっかりとイメージするための研究と言い換えてもいいでしょう。したがって、ここではもはや客観性による普遍化は重視されません。あくまで当事者的な問題との向き合い方における直観の発動が重視されるようになります。そして他の研究者 A、B、C に理解してもらうことではなく、A、B、C が「私」と存在を共有し、当事者的な自覚をもち問題解決・克服の実践を支援し、できうるなら各自の直観を発動するために、問題の解決・克服の実践に参加することが重要になります。

実は、実践型地域研究には、地域、地域に暮らす人々の主体性を認め、地域という場に自ら飛び込んでいこうとした前提から、実践への意識が自覚を確立させ、存在の共有を方法論とする直観の発動による問題の克服・解決にむけた研究という道筋が必然的に備わっているともいえるのです。この研究の仕方は、帰納法ではありません。事象の普遍性を追求しているのではなく、あくまで事象の個別性、存在が固有であるという主体性を前提と

した、演繹によって導き出されています。演繹とは「前提を認めるならば、結論もまた必然的に認めざるをえないもの。数学における証明はその典型」(広辞苑第五版)もしくは「一般的な原理から、論理の手続きを踏んで個々の事実や命題を推論すること」(Microsoft Bookshelf Basic Version 3.0)と説明されていることから明らかでしょう。つまり、演繹でいうところの前提ないし一般的な原理とは、地域の人々との存在の共有であり、当事者的な自覚であるのです。地域の人々の主体性を認め、地域と人々の存在が、「私」によって絶対肯定されることで、主体と客体という関係は存在しなくなります。そして客観性という分析に意識が向かうのではなく、地域場に存在するという当事者的な意識を「私」に芽生えさせます。実践を意識することで、当事者的意識は、自覚へと確かなものになっていくことでしょう。この自覚こそが問題克服・解決への直観を働かせる原動力となるのです。自覚が研究を実践のうちに明確に位置付けるのです。そして、地域や人々の存在をさらに持続的なものにしていく「研究」に自らをかりたてていくこととなります。

実は、実践型地域研究は、研究が人間に備わった本能的な行為だと考えているところからも発想されています。食べられる野草や薬草の発見、作物栽培、野生動物の野生化などは、研究を実践の中に位置付け生きていくための行為だからこそ、人間は世代を超えて命をつなげてこられたはずです。時には、毒草を間違えて食べて命を落とした人もいたことでしょう。生きていくために本能が行う研究は、生活の中で身近にあり、誰もが日々大なり小なり行ってきたはずです。だからこそ農耕が生まれました。近代農学が発達する以前の伝統農業の時代においては、多くは無名の人々の研究によって農業技術は発展してきました。しかし、近代農学が例であるように、人間の活動に分業化が起き、大学や研究所など、研究を職業としている集団の中に身を置くことで、いつの間にか、研究という行為・実践が本来もっていた生きるための力をどこかに置き忘れてしまっているように私は思えるのです。今では、私は研究は図3のように二つに大別することが可能だと考えています。

本能が行わせる研究

人間の生存を維持するために、食べたり、眠ったり、セックスしたりする行為と同じく、人間の本能として備わっている行為。究極的には、直面する問題の克服を試みている当事者の人々の実践に学んでいこうとする研究。

研究のための研究

義務や、オリジナリティを追及するという、契約的あるいは競争的な意志が行わせる行為。究極的には、狭い意味での研究者自身の自己満足に向かっている研究。

図3 二つの研究 (Ando (2010) を修正引用)

オリジナリティが大切だ、他の研究者がやっていないことをやるのが重要だ、他の研究者に分かってもらう、客観性が重要である、等々。大学院生や研究者には日常的に、耳にタコができるほど聞かされている言葉です。たしかに、職業的な契約行為としての研究を行う上では、こうした観点は重要であると私も思いますが、しかしそれも度を過ぎると、研究者が研究者である前に人間である事実を奪っていくことになるのではないのでしょうか。生きることは絶えず自分が直面する諸問題に当事者であり続けることです。生き続けるためには、客観性よりも当事者性が重要なのは誰の目にも明らかなのです。研究者も人生を生きていかなければならない一個人の人間です。人間性から研究を再構築していく必要性を私は痛感しているのです。研究の原点は、他者との比較や、ましてや、他者との競争にあるものではないはずです。オリジナリティは、あくまで結果でしかないと思います。「研究は生きていくために、寝たり、食べたり、セックスしたりすることと同じくらい、あたりまえのことだ。そうでなければ、食べられる野草の発見も、農耕も生まれなかつただろう」と自信を失いがちな大学院生に私は説いています。研究という行為を、意識的に、本能という生命の源に戻し、その感覚を覚醒させていくことで、現在の日本の社会、私のまわりに漂っている閉塞感を打ち破っていく生きる強さを、私自身が取り戻していきたいと願っているからでもあります。生きてみようとする歩みを一歩前にすすめてくれる気力をふるいおこしてくれる地域研究です。私はそのためには研究の原点は人々の生命をつなげる実践にあるという立場（生存基盤科学）から意識的に地域研究を専門化させてみたいのです。

京滋フィールドステーション事業で行われている実践型地域研究は、どれもが私が当初予定していたもの以上に、本文で指摘した実践と自覚の課題がよく研究内容に表れていると自負しています。また、守山、朽木、亀岡の各 FS の研究員、ならびに NPO や行政、住民の関係者の方々との協働活動が実践型地域研究として軌道にのっていると確信しています。生存基盤科学は従来の分析を中心とする帰納法の科学である必然性はないはずです。生存は帰納法の科学のみによっては扱うことができない領域です。したがって直観の演繹法による「科学」の可能性を実践型地域研究で探っていきたいと考えています。また、この場をお借りし、協力をおしみなくして下さっている関係各位に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

【参考文献】

Ando, K. (2010) "Traditional Agriculture as a Thought", Keynote Speech for International Workshop 'The Alternative Value of Traditional Agriculture for Education, Research and Development', 17-19 February 2010, Faculty of Agriculture, National University of Laos. Vientiane, Laos.